コロナが変えたくらしの姿　第5部「住む」のいま

コロナ禍は「住まい」の感染症対策への関心を高めた。安心して暮らせる住宅づくりのポイントを、換気と間取りの視点から建築の専門家２人に聞いた。

5 感染症に強い家づくり

自宅療養 空気の流れ意識

新型コロナの感染防止策の一つに、「換気」が挙げられています。自分の家で換気がどのように行われているのか、この機会に知っておきましょう。

北海道の住宅は高断熱・高気密のほか、換気も考慮し設計されています。住宅の換気システムは、外気を取り入れる「給気」と、室内の空気を外に出す「排気」の二つがセットになり、給気口から排気口へ空気の流れが生じます。

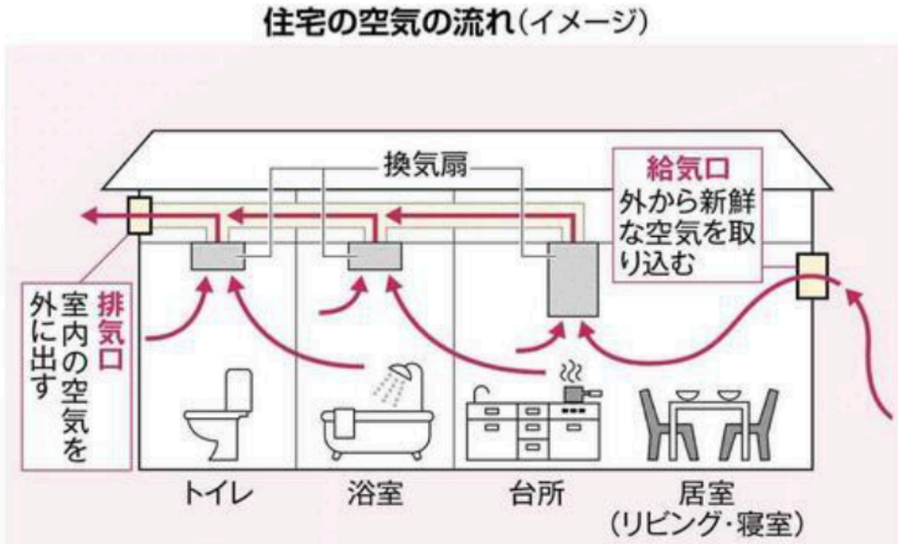
給気口はリビングや寝室に多く、排気口は一般的に台所やトイレ、浴室にあり、換気扇を回して空気を外に出します。常時換気設備（24時間換気システム）を備えた住宅もあります。

換気を考える際、家のどこから空気が入り、どこから出て行くのかを意識しましょう。例えば、コロナの感染者が自宅療養で給気口に近い部屋を使うと、その部屋の空気が家の中に広まってしまう可能性があります。自宅療養はどの部屋を使えば良いのかを考える上でも重要です。

窓を開けての換気も推奨されましたが、北海道のような寒冷地は季節によっては難しい場合もあります。その際は換気扇を強めに回すなど、家に備わる換気システムを上手に活用してください。

部屋の湿度を保つことも、感染対策として挙げられています。ただ、加湿器で部屋全体の湿度を上げようとすると、窓や壁に結露を起こす可能性があります。加湿器は人のそばに置き、室内でもマスクをして喉の乾燥を防ぐ対策が現実的でしょう。

住宅の空気の流れ（イメージ）



北海道建築指導センター（札幌）
住宅相談員　奈良 顕子さん（65）

札幌市出身。北大卒。建設会社に勤務の後、1987年に奈良建築環境設計室を設立し、室長を務める。1級建築士として新築住宅約120件、リフォーム約50件を手掛けてきた。

接触減らす動線の工夫を

コロナ禍で感染者が自宅療養せざるを得ない事態が生じ、住宅内で感染をどう防ぐかが大きな課題になりました。今後も新型コロナのような感染症の発生を想定して、間取りや動線を考える必要があります。

感染を広げないためには、療養者と同居者が接触しないように、行動範囲を分けることが大切です。特にトイレや洗面台、浴室といった水回り空間がポイントになります。

住宅内に複数のトイレや洗面台があるなら、一つを療養者専用に、もう一つを同居者専用に使えば、行動範囲を別にできます。1カ所であっても、リビングなど同居者がいる部屋を通らずに療養者が行き来する動線ができれば、接触を少なくできます。

ただ、現在の住宅の大半はそのような造りになっていません。2010年以降の住宅雑誌に掲載された新築の一戸建て住宅の平面図を調べたところ、トイレが1カ所の住宅は全体の半数。部屋から浴室に行くためにリビングを通る住宅も、同じく半数に上りました。

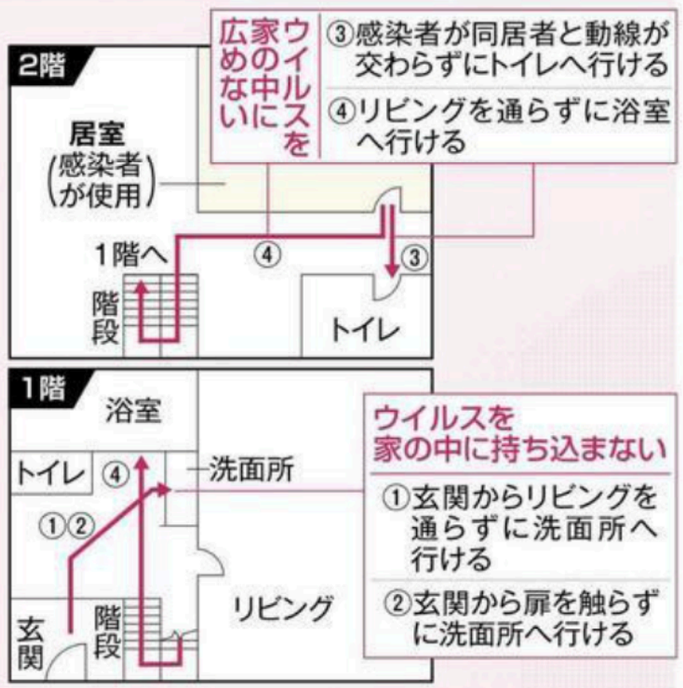
療養者と同居者の動線を分けられない場合、共用部分の消毒の徹底や動線が重なる廊下の換気、空気清浄機の設置といった対応が必要です。

自分の家の動線を確認し、同居者に自宅療養が必要になった場合の対策をあらかじめ考えておきましょう。今後、住宅の改修や新築を計画する際は、トイレや洗面台を個人の部屋と同じ階に設ける選択肢も頭に入れてください。

＝第5部おわり＝

（鈴木雄二が担当しました）

美唄市出身、北大大学院工学研究科修了。同研究科助教などを経て、2018年から現職。住宅の空調、省エネなどを研究する建築環境が専門。

北大大学院工学研究院准教授　菊田 弘輝さん（42）

感染症対策を踏まえた間取りの例（菊田さんによる）